

平成 18 年度学術ポータル担当者研修

レポ ー ト

平成 18 年 9 月 20 日

久 保 い く こ

受講者番号 15 横浜国立大学 図書館・情報部 図書館情報課 図書館企画係

平 田 義 郎

受講者番号 16 横浜国立大学 図書館・情報部 図書館情報課 雑誌管理係

はじめに

このレポートでは、本学事務局の企画課職員を対象に 8 月 31 日に行ったプレゼンと、リポジトリの作業を進めるための図書館職員ワーキンググループのメンバーを対象に 9 月 7 日に実施したプレゼンを取り上げる。研修発表は、8 月 4 日開催の第 1 回学術情報リポジトリ運営委員会での説明を想定して作成したが、説明をするための時間を確保することができなかったため、改めて図書館職員を対象に行うこととした。また、その準備中に、企画課職員を対象に説明を行う機会が得られたため、こちらも取り上げる。

I. 館内職員ワーキンググループでの説明

(1) 発表資料の状況設定

学内の研究者向けにリポジトリへのコンテンツ登録マニュアルを作成するために、図書館職員 5 名から成るワーキンググループが作られた。そこで、リポジトリについて詳しく知らないメンバーを対象に、リポジトリとは何かというところから説明するプレゼンを行うこととした。メンバーにはあらかじめ「先生方を対象に行う広報の練習になるという意味もあるが、内容は職員向けに分かりやすいものにするつもりである。時間は 10 分くらいになると思うが、感想を聞きたいので、30 分程度みて欲しい」と連絡しておいた。

(2) 発表内容抄録と研修当日の講師からの助言、及び研修発表との改訂部分

〈発表内容抄録〉

- 1) 機関リポジトリとは何か、意義、目的、特徴、リポジトリソフト。
- 2) 横浜国立大学の機関リポジトリの進捗状況、計画。
- 3) リポジトリにいたる歴史、オープンアクセス関連の動き。
- 4) リポジトリと著作権、グリーンジャーナルとは。

〈研修発表との改訂部分〉

1) の項でリポジトリの語義や、リポジトリソフトにどんなものがあるかを追加。3) と 4) は新設した項目である。教員向けの登録方法説明や、リポジトリのメリットを強調した部分は割愛した。ROAR や RoMEO から統計資料を引用してきたのは、説得力を増そうとしたため。

〈研修当日の講師からの助言〉

千葉大の鈴木さんより、日本や世界で多く行われていることを説明すると良い、という助言を頂いた。個々のリポジトリでの取り組みを説明することはできなかったが、今に至るまでの歴史的な背景に言及するべく、オープンアクセスの動きを箇条書きし

たスライドを作ってみた。

(3) リハプレゼンの概要（日時、場所、発表者、発表対象、参加人数 etc.）

日時：2006年9月7日（木）15:00～16:30

場所：中央図書館2階館長室

出席者：リポジトリワーキンググループ 5名

内訳：

平田雑誌管理係主任、久保図書館企画係員、図書管理係員、資料サービス係員2名

発表者：久保

進行：プレゼンが30分程度かかった。その後、実験稼働中のリポジトリサーバに接続し、実際にリポジトリを使ってみるという実習コーナーも実施した。

資料：職員WG（横国大）.ppt

機材：ノートパソコンのパワーポイント画面を、プロジェクターで映写した。

(4) リハプレゼンへの反響（アンケートをとった場合の結果、感想の声等）

当初は10分程度のプレゼンのつもりだったが、職員向けなのであれこれと豆知識を投入しようとして盛りだくさんになってしまった。また、そのあとにワーキングの作業の打合せを行ったこともあり、時間が長引いてしまった。用意した資料は、セルフアーカイビングやグリーンジャーナルの説明が重複して登場してしまい、あまり順序が良くなかった。

プレゼンの構成について、以下のような感想があった。

- ・論文ではないので、歴史的背景は省略しても良い。
- ・「リポジトリにいたる歴史」は、流れを追える形の方が分かりやすい。
- ・「グリーンジャーナルとは」を「オープンアクセス関連の動き」と絡めた方がいい。
- ・横国大のリポジトリの話 最後に回した方がいい。
- ・図書館員向けなら、登録が伸び悩む理由を織り込んでも良い。

発表したプレゼンは、前半が最低限の知識、後半があった方がいい知識という順序のつもりだったが、全体が短いので、確かに一般的なリポジトリの話から横国大の話に移ると分かりやすかったかも知れない。

今後、教員向けに発表するときのためのアドバイスとしては、

- ・今回は口頭説明を省略した著作権や、登録の手順に重点を置くと良い。
- ・伝えたい部分をはっきり示して、それ以外を潔く省く思い切りが必要。

教員向けならば「論文を登録してください」が主なメッセージになるので、またスライドの改造をするつもりである。

(5) その他（備考、今後の予定と希望 etc.）

今回のスライドは、総務部企画課との打ち合わせのために用意したものから、他システムとの連携を除き、そして歴史と著作権の話を加えたものだが、その作業に費やす時間が 1 日しかなかったので、やはり完成度が今ひとつだった。北海道大学の著者最終稿の図解を加えたり、オープンアクセスについてもっと言及する必要があったと思う。

II. 総務部企画課との打ち合わせ

(1) 発表資料の状況

去る 7 月 13 日に、教育研究評議会で「学術情報リポジトリ運営指針」が決定したが、そのときに資料として配布された委託事業応募書類の中の「システム概要図」に、学術情報リポジトリと教育研究活動データベースを連携させるという矢印（希望的計画の意味で点線矢印にしてあった）を記載していた。このことについて、教育研究活動データベースを管理する総務部企画課から説明を求められ、会議が設けられた。

図書館側からは、機関リポジトリと教育研究活動データベースの連携は将来に向けた構想であることを説明すると共に、今年度は論文を多く書いている教員にピンポイントでリポジトリ登録を働きかけたいので、教育研究活動データベースを使って教員の論文数ランキングを作ってもらえないかと、依頼をすることにした。

(2) 発表内容抄録と研修当日の講師からの助言、及び研修発表との改訂部分

〈発表内容抄録〉

リポジトリの定義、意義、特徴、システム概要。

横浜国大におけるリポジトリ進捗状況とコンテンツ整備案。

企画課と図書館情報課の連携を必要とする部分の説明として、コンテンツ収集のための統計データ、業績一覧からリポジトリへのリンク。

〈研修発表との改訂部分〉

大学職員向けなので、登録の方法についての詳しい説明は割愛した。

〈研修当日の講師からの助言〉

教員向けならコストの話はしない方が良いが、大学職員向けなら大学のメリットとして雑誌費が安く出来るかもという話をしてもよいだろう、という助言を頂いた。そこで、今回は職員向けなので、リポジトリの意義のなかで、価格が高騰する商業誌への対抗策なのだ、という一文を入れてみた。

(3) プレゼンの概要（日時、場所、発表者、発表対象、参加人数 etc.）

日時：平成 18 年 8 月 31 日（木）15:30～16:30

場所：事務局 2 階第 4 会議室（定員 10 人）

出席者：総務部企画課 4 名、図書館・情報部図書館情報課 5 名

内訳：

総務部企画課長、課長補佐、評価・調査係長、係員、

図書館・情報部長、図書館情報課長、課長補佐、図書館企画係長、久保図書館企画係員。

発表者：久保

資料：企画課（横国大）.ppt

機材：ノートパソコンから 17 インチ液晶ディスプレイに出力した。

(4) プレゼンへの反響

パワーポイントを使った説明の所要時間は 15 分程度だった。その後、企画課長からの質問に答える形で図書館・情報部長から補足説明があり、図書館情報課長補佐から、企画課に協力を求めたい部分について、詳しい説明があった。

企画課からの回答は、研究者総覧などの所定の目的以外には使用しないという条件でデータを収集しているので、リポジトリのために提供できるかどうかを検討することだった。

研究者総覧の業績一覧からリポジトリにリンクしたい、という計画については、話が具体化するにしてもだいぶ先の話だ、ということを理解してもらえた。その場合、システムに手を加える必要があるのは教育研究活動データベースの方なので、今回は、そんな話もある、というところに留まった。

話し方については、声は聞きやすかったとの感想があった。

(5) その他（備考、今後の予定と希望 etc.）

パワーポイントのスライドを作る作業に 3 日かかった。せっかく発表を作るなら、もっとアカデミックなものを作りたいと思った。

まとめ

研修発表は、スライドを作る時間が足りず、字ばかりだった。研修で講師の先生方のお話や、他大学の発表を見聞きしたことを大いに活かして、今回の発表は見た目がきれいでもう少し準備がなされているものを用意したつもりである。

本学はまだ、リポジトリ稼働開始に向けての準備の途上にいる。この 4 月の組織改組で新設された「図書館企画係」にて機関リポジトリに取り組むこととしたが、機関リポジトリ専任ではないため、総務やパソコン管理や広報や雨漏り対応等を行っており、日頃の業務の中でいかにリポジトリの作業を進める時間を作るか、が当面の課題のようにも思う。

先進的な動きに目を向ければ、リンクリゾルバと各機関リポジトリとの連携という話もあるようだ。技術が進んで環境が整えば、リポジトリが普及して、知名度が上がって、コンテンツも集まりやすくなるかもしれない。書いてもらった感想のなかに「出版社に著作権が移転している場合が多いのなら、日本の出版社にもグリーンジャーナルについて考えて欲しいです。でも、まず機関リポジトリが普及しないと日本の出版社は動かないのでしょうか」というものがあった。日本では国立大学図書館協会学術情報委員会デジタルコンテンツ・プロジェクトのアンケートが RoMEO のような役割を果たしているが、そういった活動を発展させてリポジトリを持つ日本の大学が協力することで、より多くの出版社を対象に、より更新を頻繁に、著作権ポリシーの情報を蓄積していければ、学術情報の流通がより透明になるだろう。さらに進んで、著者である研究者が、出版社に著作権を移転させずに自ら権利を行使することが常識になれば理想的である。